

【研究ノート】

ガルフリドゥス作『聖ゴドリクス伝』について その部分国訳嘗試を中心にして

佐々木 克 巳

小 引

聖ゴドリクスについてはこの世に2篇、刊本伝記の存在することが知られている。19世紀の半ばに出版されたレギナルドゥス作の『聖ゴドリクス伝』と、既に早く17世紀の末葉には公刊されているガルフリドゥス作の『聖ゴドリクス伝』である。両者の関係については先に詳述しておいた¹⁾のでここに繰返すことをしない。

ヴァルター・フォーゲル以来の歴史家達は、その著書あるいは論文の中でゴドリクスに論及しなければならなくなった時には、フォーゲルに倣って、史料としては専らレギナルドゥス作の伝記を利用して来た。ガルフリドゥス作の伝記をも併せて活用しているのは、私の知る限りにおいて、世界で二人だけである。フランスのアラン・デルヴィル²⁾と、わが宮松浩憲³⁾である。当初私は、この併用に驚きを覚え、敬意をすら抱いたのであったが、レギナルドゥス本とガルフリドゥス本の関係を知るに至ってからは、苦勞してガルフリドゥス本を読んで見ても、それほど大きな功德をそのことに期待することはできないであろう、という見通しを立てることができたのであった。しかし何分にも、私は、止むを得ない事情があったとは言いながらも、妄りに私抄本を作ってそれに依拠したばかりに、とんでもない思い違いに陥ってしまったと言う何とも苦い経験をしているので、できることならば、どうにかしてガルフリドゥス作の『聖ゴドリクス伝』のコピーをも取り寄せて、自分の両の目でそれを読んで見るに如くはないと思ひ定めたのであった。

ガルフリドゥス作の『聖ゴドリクス伝』は、1643年にボランドゥスBollandusが創刊してから実に300年にもわたって刊行が続けられた全61巻にのぼるActa Sanctorum『教会暦日表順の聖人伝』の内の、Mai. t. V.に収められて、アントウェルペンで1685年に刊行されている。⁴⁾この巻の、68頁から85頁までを占めている。ただし伝記の本文が始まるのは70頁からである。

¹⁾ 佐々木克巳「『聖ゴドリクス伝』部分国訳嘗試」『成蹊大学経済学部論集』第38巻第2号（2008）を参照されたい。

²⁾ Derville, Alain, De Godric de Finchale à Guillaume Cade, dans *Le Marchand au moyen âge*, Paris 1992, p. 35-47.

³⁾ 宮松浩憲『西欧ブルジュワジーの源流』九州大学出版会（1993）、同『金持ちの誕生』刀水書房（2004）

⁴⁾ Vita S. Godrici eremite, auctore Galfrido monacho coaevo, in *Acta Sanctorum*, Mai. V., P. 68-85, Antwerpen 1685.

全体は序章Prologusに続いて、第I章Caput Iから第VI章Caput VIまでの6つの章で構成されている。各章は更に節に区分されて、各節には第1節から第74節までの通し番号が打たれている。その上校訂者の用意した付注Annotataが傍注の他に章毎に添えられる。試訳に添えておいた私の訳注はこの付注、傍注に負うところが大きい。

以下に掲げるのは、序章からは第1節はこれを割愛して第2節のみの、第I章はその全部（通し番号で言うならば第3節から第9節まで）の、そして第VI章からは最終節である第74節を取り出しての、部分訳である。

拙訳がテキストから独立して、それだけで存立し得るだけの資格を備えていると錯覚してのことでないのは改めて断るまでもないことであるが、今回は対訳風のテキストの併記はこれを避けることにした。この史料集については、先年（1966 - 1971年）、ベルギーの出版社Editions Culture et Civilisationがその復刻版を刊行するという案内を当時同社から貰っていたし、⁵⁾2001年にはそれがCD-ROM化されたとも聞いている⁶⁾ので、現在この史料集は稀覯本という程のものではなくなっていると思われるからして、拙訳についての高教を仰ぐ上での機縁もまた既にそれなりにその数を増していることが考えられる。そこで、必要とする紙幅を倍増するという結果を招来すること必定の、対訳形式はこれを避けた次第である。

なおこのガルフリドゥス作の『聖ゴドリクス伝』に近代語訳があることを私は聞いていない。以下の試訳の中の〔 〕の内は訳者の補筆である。

試 訳

伝 記

同時代の修道士ガルフリドゥス作

シトー派大修道院の手書本を底本とする

序 章

2 私は、少年の頃、年老いたゴドリクスを訪ねたことがある。少年が、老人を訪ねたのである。そして、何度も何度も訪ねていったその思い出は、快いものとして心に残っている。ゴドリクスは、身体つきは極く小さかったけれども、精神の高貴さによって、天に向って直

⁵⁾ 言うまでもなく私は購入を断念した。

⁶⁾ 高山博・池上俊一編『西洋中世学入門』東京大学出版会（2005年）170頁。

立していた。そして、若い頃は間違いなく黒髪であったが、年老いてからは白いものがまじって、天使のようであった。額は広く、両の目は青みがかった灰色、眉毛はもじゃもじゃで、右と左とがくつつきそうである。面長で鼻筋が通り、顎鬚も長く、口許は上品、はればあったい唇は濡れて赤く、肩は盛り上って、腹は出ていない。それもそのはずである。軛があたったためにできた硬直が肉をそぎ落してしまったからである。身体の、その他の部分も立派に均整がとれてい、力が備わっていた。そして卓越した敏捷さによって人に、低い身長よりも威厳のある容姿の方を見せつけていた。彼は、修道士としての自分の生活のすべてを、ダーラム修道院長の支配の下に置いていた。彼は最大限の注意をば払って、自分よりは他人の言うことに従うという意味あいで、人間の傲慢という悪徳に陥らないようにしていた。その証拠に、彼は60年という歳月を孤独な生活の中で過していながらも、ダーラムの修道士だったのである。老人は来る日も来る日も、フィンカレの、自分の住まう場所を巡回していた。そして彼は、自分が生きている間に行った徳行の証しを立てることをば、死者になっても止めることがなかったのである。

第1章 商業、巡礼、ウルシングハムスでの、次にはフィンカレでの、定住隠修士の生活

3 レギナルドゥス本 -- ノーフォークと呼ばれる州出身の、尊敬すべき主の証聖者、ゴドリクス、その父はアイルワルド、母はエドウェン。二人は、ともに貧しく、俗人であったけれども、キリスト教の信仰の深さにかけてはまことにもって立派であった。しかし、ゴドリクスは、少年の年々を家に在って暮した後に、成長していくにともなって、並よりも利口な魂のために、世俗の生活の知識をば手に入れたいものと、望み始めたのであった。そして、商人の熱心な努力に負けてはならじと張りあって、世俗の利益のための、仕事の訓練をば始めたのであった。村々を、そして城々を、遍歴しては、這い上がって、仲間達を凌ぐまでに、そして自分の商売の利益によって、自分の貧困と言うよりは両親の貧困をば改善するまでに、幸運な富を手に入れるための、大きな努力をしたのであった。それ故に、ある日のこと、人々がウェレストレムと呼ぶその場所で、彼は、食べ物を探し求めては、海岸へと出て行った。大波が、全く大きな輪の形に〔沖へと〕引き寄せられて、今やまさに、4マイルにわたって、乾いた砂地を後に残していた。その砂地を勤勉に追跡していた探索者は、3頭のイルカを発見した。そしてナイフを振って死んでいるように見えたその内の1頭から若干の肉片を切り取ると、帰りを急いだ。しかし疾走する者の不安を先まわりして、大量の水がやって来る。そして、ある時はくるぶしを、ある時は膝を、ある時は脚を、最後には頭を、完全に覆いかくす。ところが驚いたことに、彼は水に対して反抗することを始めた。そして荒れ狂う渦の

下を1マイル以上も進み、無傷の状態の自分の獲物をば手に持って、人が訪れることのない、入江の、彼がそこから海へと入って行った、その同じ場所へと、上陸した。そしてこの当然の報いには、預言者〔ヨナ〕のあの物語⁷⁾がよく似合った。海の深い淵が私を封じ込め、海水が私の頭をすっきり包み込んだ。そして事実、彼は、天変地異という刑罰の危機に際しても、高い誠実さのおかげで、いかなる意志の弱さによっても、沈められるということはありませんでした。と言うよりは、むしろ、神の庇護によって保護される価値が、追い剥ぎの危険から、海上での危険から、街道での危険から、荒野での危険から、保護される価値が、彼にはあったのである。

4 それ故に、16年にわたる、商品と船の操縦との生活が終ると、彼は商業を営むことの続きとして、神聖なる巡礼の難儀をばすことにした。危険の時にその恩恵が立証された諸聖人の記念物をば、しばしば訪れ、崇拝することを熱心に志したのであった。女子修道院長の手によって塗油の儀式を完全に済ませると、男は突然に、外部で、熟視する人々の両の眼に見せつけていた愛をば、内部で、自分の中で、地上の野心への軽蔑と清貧への憧れとに変え始め、俗人の服装を身にまといながらも修道士の謙虚と質朴とを装い始めたのであった。その上に彼は、施しをする際には仲間を遠ざけていたのである。あなたの右手が何をしようとしているかを、あなたの左手が知らないようにするために、である。⁸⁾

5 そしてローマでは、使徒達の墓に詣でた。そして遠くエルサレムへと旅立った。そしてヨルダン川の浴場で靴を脱ぐと、それから後彼は、その死の日に至るまで裸足のままでいることになった。それから、故郷と父の家とに帰った。(もちろん未だ世俗の生活を捨てることはなかったのである。) 自分のある家父長の親切に委ねた。そして、その男の家の、一切の世話をした。ところがそこには、いく人かの従僕達がいた。彼等は、夜になると、羊やその他の大家畜から食べ物を手に入れようとした。そして翌日の朝、あたかも狩猟から持ち帰ったかのように装って、盗んだ動物の肉を家に運んで来た。ゴドリクスは、その肉を食べ物として食べて見て、時折その食べ物に獺の肉の味わいを全く感じることがなかった。その時には、その連中を盗みの罪人だと彼は断定した。そして彼等の主人に、この最悪の罪に関して

⁷⁾ ここで預言者というのは、旧約聖書の中の第5の小預言書であるヨナ書の主人公。

紀元前780年頃、ヨナが神の命に背き、逃走中に海中に投げられ、巨大な怪魚に呑み込まれて、三日三晩その腹の中に留まった後に陸地に吐き出され、後に回心したという物語。

川口洋『キリスト教用語独和小辞典』同学社（1996）Jonaの項、及び小林珍雄『キリスト教用語辞典』東京堂（1954）ヨナの項、に拠る。

⁸⁾ マテオによる聖福音書第6章3。「あなたが、施しをするときには、右の手でしていることを、左手にさえも知らせないようにしなさい。」訳文はドン・ボスコ社版を拝借。

彼等を告発した。彼は、贖罪行為をも動機として、いく分かの罪の浄化のために、聖アエギディウスの記念物を訪れた。⁹⁾そして次に、二度目のローマ行きを決めた。母親は、ゴドリクスの願いに気づくと、夫の許しを得て、息子に同行することにした。それ故に二人の旅が続いたのであるが、その時に、絶世の美女が現れ、離れることができないように、そして親密に、二人につきまとって、離れることがなかった。そして極めて忠実に、奉仕するのであった。ゴドリクスが許しを与えると、その都度彼の両足を洗い清め、その上、ベッドをしつらえた。そして夜になると、自分の身体をば、親しくゴドリクスに寄せてくるのであった。しかし、それにもかかわらず、この女は、この男の心を、合図によって、仕草によって、言葉によって、不道德なことの方へと引き寄せながらも、見えるような形では、一人でいるこの男に、そしてその母親に、自分の身体を与えたり、引き渡したりすることはなかったのである。それ故に、主の男〔ゴドリクスのことである〕は、本当に女性がいるのか、それとも、女性のベールの下には幻想がかくれているのか、大いに迷わざるを得なかった。それ故に、この巡礼の道程を終えて、ロンドンへと近づいた時に、女は二人に、別れを告げて言った。御覧なさい。アルプス山脈の南と北です。あなた方は、私を道連れにして、随分と長くて危険な道程を歩き通しました。そして¹⁰⁾予てから訪れたいと願っていた故郷の地〔ローマ〕を知ることができました。私の方は、自分がそこから立ち去って来た元の所へと立ち去ります。その場所に永遠の居所を持ち、天にあります神の家に住むためにです。しかしながらあなた方は、主をほめ讃えなさい。そして主を恐れなさい。そして神の恩寵によって聖使徒達から期待されたことをある限度までやり終えると、以上のことを言った上で、その姿が見えなくなった。そしてこの徳のしるしは、古い物語に一致するものであった。何故かと言えば、〔大天使の一人〕ラファエルは、未知のトビアの前に、眼に見える形で現れたからである。¹⁰⁾そして〔ゴドリクスは〕すべてのことを熱心に、完全に、管理しながら、〔母を〕父の許へと連れ戻したのであった。

6 ゴドリクスは、得ようと努めるべき、そして獲得されるべき、天国についての、合図の、最初の成果に心動かされて、主の命令を熱心に繰り返して自分で考えた。あなたがもし完全になりたいなら、もちものを売りにいき、貧しい人々に施しなさい、・・・それから来て、私に従いなさい。¹¹⁾ゴドリクスは、自分が手に入れたすべての物の価値を否定した。こうして彼は、現世の財貨が貧しい人々の役に立つようにと分け与えられることによって、大きな

⁹⁾ 聖アエギディウスと呼ばれる場所はガリアに複数ある由。

¹⁰⁾ 旧約聖書続編中の一文書トピト記に記されている由。『新カトリック大事典』(研究社)第III巻に拠る。

¹¹⁾ マテオ福音書第19章21。訳文はドン・ボスコ社版に拠る。

成功を収めながら天国を買い入れたのであった。両親と故郷とを見捨て、荒野を探し求めることに彼は決めた。そして主が定めると、カルレオルム¹²⁾に到着した。そしてその同じ場所で、あまりにも長い間休息の時を過したために、住民達がこの者との交際を懇願し始めた。彼は住民達と親しくなるのを避けることを熱心に望んで、森の中に隠れ場所を得ようと努力した。そして野獣の巣に居住した。狼との共住も、蛇との共住も、何であれ野生の動物を見ることも、又はそれに觸れることも、彼は恐れることがなかった。そしてこれらの動物は、彼等の同居者をば傷つけることがなかつただけではなくして、天の教えを受けた者をば本当に畏敬さえしていたのであった。この者の食べ物、植物の根、森の蜂蜜、同じく堅果、そして果物、であった。そして喉の渇きの甘い慰めとしては流れる水が飲み物を与えていた。彼は歩くことによって、ようやくにして1スタディウム〔約190メートル〕の散歩道を作ることができた。更には地上にひれ伏して祈りを捧げるか、さもなければ片膝を折って、悲し気な視線を天に送っていた。そして帰り着く前に陽が沈んでしまうならば、どこであれ、身を横にして一夜を過すのであった。そして、このようにして、森の人跡稀なところを自分のものにしてある時に、偶然に彼は、ある孤独者の洞穴に入り込んでしまった。そしてそれまで二人は会ったこともなかつたのであるが、お互いに抱擁と接吻とを繰り返している内にそれぞれの名前前で呼びあうようになった。そして居住する者二人は、神のことを話しあう事でお互いに元気づけられた。以上のことにおいて、ゴドリクスは、老人に対してへりくだった態度で暮していた。彼等の共同生活の魅力を老人に与えるためである。年長者はゴドリクスに答えた。お前さんが私に告げているように、主は、この老人の亡骸を埋葬することになるが故にお前さんにこの孤独な生活を指し示し給うたのだ、と。そしてこのようにして、二人は、代る代る敬虔の手本としてお互いを追い越しながら、2年と9か月、一緒に暮した。そして年老いた方が突然、体力の点で役に立たなくなり始めた。しかしその者の無力が大きくなればなる程、それだけ注意深く、ゴドリクスはその者に仲間としての世話をした。そして15日の間、彼は昼も夜も眠ることなく過したので、長時間の看護のために、疲れてしまった。彼はあらゆる方法を講じてこの看護と戦い、眠気が入り込むことがないようにと、眠気のために精神が身体から抜け出していくのを見ることがないようにと、自分の両眼と約束を交した。それにもかかわらず、眠りたいという欲求に彼は打ち負かされて、翌日には眠り込んでしまった。そして目がさめると老人が死んでいるのを発見した。そして彼は、老人の死をば自分の怠惰のせいであるかのように嘆き悲しむのであった。そして神への哀切なる祈りに長時間没入することによって魂をば彼の部屋へと呼び戻すのであった。そしてもう一度、〔その魂が〕天の隠棲地へと登って行くかのように打ち眺めることができたのである。何故ならば、

¹²⁾ スコットランドとの境界に近い所。後に司教座の所在地になる。

大急ぎで審問すると、以前の居住者は小さな身体を震わせ始め、心臓をあえがせながら、びくびくと動き始めたからである。そして暫くすると、彼は、もう一度出発しながら、不思議なことに、きらめく球の中で、限りない美しさに包まれた自分の姿を、祈りを捧げるゴドリクスに見せたのであった。そして天国へと登って行きながら、きらめくような清澄の中で、何と自分は賞賛されるべきことをしたか、また何という栄光に包まれたことであるか、と宣言したのであった。この老人は、エセルリクスという名前であった。そしてこの者の居所はウィルシングハムにあった。¹³⁾ダーラム修道院の修道士達が、古くからの友誼の故に彼の遺体をダーラムに運んだ。そして彼等が彼の名誉にふさわしい墓地に埋葬した。

7 それ故に彼は老人が与えてくれていた慰めを奪われ、その場所を立ち去って、ひとり荒野を放浪した。そして自分の行動を支えることで先導し、安全を助けることで管理してくれる神の愛を、切に請い求めた。次のように述べる声が天から発せられた。汝が再びエルサレムを訪れるならば、汝は十字軍に入って、キリストのために兵士になるようにせよ。^{かね}予てからその保護に特別の信頼を寄せていた祝福されたる司教クトベルトゥスのこの声を聞いて、彼はびっくり仰天して助力を求めた。すると直ぐさま、この者のそばに、司教達の内の誰か一人が恭しく立って、自分はクトベルトゥスという者であると名乗り、天からの道に同行することを求めた。そしてどこへ行っても自分自身の同行が慰めを与えると約束する中で、ゴドリクスは、自分がそこで激しく敵と戦うことになるフィンカレと呼ばれる場所へと上陸した。それ故に、彼は、神の幻影と励ましとによって心身が強くなって、狂喜しながら、善いことをしながら、そして前に記しておいた修道士の死によって感じた苦悩を神の約束という希望によって和らげながら、進んで行った。彼はダーラムの、荒野の、人里離れた場所を急いで通って、イバラのやぶとイバラの茂みとで荒れ果てた、そして虫と蛇とが通り抜ける、そしてそれまでは虫と蛇とがうじゃうじゃといた、場所へと、接岸したのであった。最大の困難を冒してその場所の内部に入り込み、入念に調査をした。フィンカレのわれわれの仲間達よ、かつてこの近くにいた大声で呼ばれる人達に、そして又羊を飼う者達に、行って水を与えようではないか。ゴドリクスは、そこが以前修道士になろうとしていた彼に神の啓示が予言したことのある、正にその場所であることに気がついた。その場所は、その同じ場所に自分の率いる者達と一緒に住んでいた、フィンクという名前のブリタニア人の王に因んで、フィンカレと呼ばれている。ところで、その場所は、ウィリ川の岸に位置していた。それ故に、ダーラムの司教ラヌルフスが与えると、彼はこの荒野に居住する考えを抱いた。そして樹木から枝を切り落とし、葉の繁った柏の樹の下に、小さな家を建てた。レギナルドゥス本。

¹³⁾ 又はウルシングハム。第I章の表題ではin VVlsinghamo.

それ故に高潔なる外来者は、その家への神聖なる愛着を熱心に抑止しようとして、狼の像を飾った。そして狼の像は、あたかも血を求めているかのように、大急ぎで家の中に搬入された。しかしこの家からは祈りのために武器は一切捨て去られ、十字架の像を対置した。そして抑制された努力によって、暴れまわる獣のもたらす屈辱を速やかに去らしめた。

8 ゲルマヌス本。しかしその安住の避難所をしっかりとしたものにする前に、彼は裸足で、第2回目のエルサレム行きをした。しかし巡礼の苦勞が終ると、より自由に諸天使に向って精神による巡礼をするために、彼は自分の住居に戻った。そして、飢えと渇き、寒さと裸、断食と不眠と祈り、の内に、隠修士の生活を守った。そしてその生活をば忍耐と、不屈で勇敢な行為とによって、完成へ向けて、忠実に続けた。この者を恐れさせるものは何もなかった。獣の粗暴も、虫の種々多様であることも、盗賊のおどしも、悪魔の幻も、とげの野蛮も、そして住居そのものの未開の醜悪も（この住居はこれだけ多くの不利な条件によって人間の住み難いところにされていたのである。そういった不利な条件がその同じ所に集まっていたのである）この男を恐れさせることはなかった。どうしてかと言えば、完全なる神の愛が、すべての恐怖を戸外へと去らしめたからである。そして蛇との有毒なる同居に仰天しなかっただけではなくして、両足と脛骨のまわりで蛇を厚遇するという親切によって応えたのであった。その上、蛇は、偉大さに身ぶるいを覚える程の2年間、入り来る蛇達と出て行く蛇達の欲するがままに、この男と共に居住した。そして棲み家に火が点じられる時には、蛇どもは熱の方への広がっていった。そして蛇どもの出すことのできる喜びを共にする音を出すのであった。〔ここにdepositaqの語が入るが語義未詳〕蛇どもは、自然の、無害の、野蛮であって、触ることのできるもの、に見えた。ようやくにして彼は、滞在の時間と注視の頻繁とを確認すると、かなりよく考えた上で、報復を加えること〔にした〕。蛇どもを素手で掴むや外へと投げ出した。そして神の御名の宣誓の下に、彼の家畜用小屋からの永久追放を宣言した。そして数日にわたってその居住地を入念に耕して、森の繁茂の度合いを低くすることで居住地の境界を広げた時に、遠くから見て平静であるばかりではなくして、地形と外観との点でも居住に適している平地が出現した。彼はそこへと移ることで、古い小部屋を見捨てた。そして彼に必要な礼拝堂と小さな家との建設を始めた。しかし時が経過し、道徳的卓越と共に名声がいや増すと、この男の許には、イングランドの近い地方からも遠い地方からも、男女両性の、身分もいろいろ、年齢もいろいろの、次第にその数を増して行く人々が群り集って来た。ある者達は居住地の変化に驚嘆していた。ある者達は修道士としてキリストの戦士に参加したのが最近であることを尊敬していた。ある者達は生活の刷新と信仰のまねびへと、心を燃えさせた。この者は、すべての人々に救いの言葉を伝えた。そして、俗人であったので、文字を知らなかったのが、文字で書かれた一切のことは、言うまでもないことであるが、

言葉で記憶していたのである。

9 彼は、できる限りの努力をして、見せびらかしという病根を回避しながら、人間から見られることを避けていた。あるいは人間の視線によって気づかれることを、あるいはまた見つけ出されることを、彼は本当に心配していた。もし何か近づいていると予感したならば、彼は一層人里離れた場所へと、避難するのであった。そして、いかに長い間、予感したものが近づいて来なくても、穴の中に、又は低木の茂みの下に、姿をかくしていた。もちろん、人間の交際というものを心底教え込まれていた近隣の人々は、同じ場所にこの者がいることに対して介入して来た。そして自分で食べ物を運んで来る者達は彼の居住地に食べ物を貯蔵した。彼はそのことを嫌って、直ぐに激怒した。そしてより遠くの隠れ場所へと赴いた。その一方で彼は、立ち去る者達には近づいていった。そして彼等がどこからか持って来る物は神への捧げ物にしながら、そしてその者達の幸福のために返礼しながら、近づいていった。その者達は、それが通り過ぎる人々の習慣になっていたので移動したが故に、彼もより高い丘へと移動した。彼等が持って来た物は、時々、貧しい人々や生活に困っている人々に分け与えた。しかしいつかある時、有力者とかかわりをもつなどということはなかった。彼は生活の必要のために、財産に屈するということが絶対になかった。実際彼は、それまでというもので、太陽の光を浴びて、孤独な生活を大地で送っていたのである。しかし、時間が経つと、彼は自分の労働で自分を助けるために、両の手で荒野を引き裂き始め、いばらの茂みを鋤でひっくり返し始め、そして、穀物の種子を大地に委ね始めた。そして、そのことで腹を立てた近隣の農夫達は、非常識なこの者を糾弾した。そして、非難する農民達は、悪意を以て、穂が出始めているこの者の穀物をば滅茶苦茶にってしまった。しかし、その人は、忍耐強く、黙々と、蒙った損害に耐えた。しかし、収穫の時が来ると、彼が手に入れた収穫は、乏しいものではなかっただけでなくして、さらにその上に、忍耐に由来する神の当然の贈り物として、多種多様な物を彼は受領したのであった。

第 VI 章

74 それ故に、尊敬すべき老修士死去の報せに接すると、司教座所在地の全体が衝撃を受けた。そして、男も女も、群を成して、その人の荘重なる葬儀へと、大勢が集って来た。また大修道院長のゲルマヌスが、修道院の仲間修道士達と一緒に来る。修道士達が遺骸から汚れを拭き取って、恭しく老修士の身体を清めた。そしてその人をば、半分羊毛で作ったシャツで、次には山羊の毛で作った敷物で、そうして最後には頭巾で、くるんで、立派に覆いかぶせた。ただ足だけは、裸にさせたままにしておいた。集って来た群集はその足に競って熱

い接吻をすることに大騒ぎをした。その上に、その人の遺骸から何らかの小部分が自分に与えられることをと切望する信者が、何人かいた。そしてせがまれた仲間修道士達は、爪を両足の指から深く集めた。すると不思議なことに、まるで生きているかのように、血が噴き出すのであった。そして両手を切断すると、返り血を浴びた。そして、以上のことがあって、翌朝更に、傷つけられた片方の足の血のしたたりがまた新たに続いていた。修道士達の内のある者が、その血のしたたりの聖なる傷痕に唇で觸れることによって接吻をしている間に、その者がいとも長い間それによって苦しめられてきたアナトロペス病〔消化器病の一つ〕が癒った。その後は、予告されていた苦しい病気を経験することがなかったのである。それ故に、長である大修道院長、そして修道士達は、聖なる修道士の身体を、外で待ち望んでいる民衆が少くとも眼で見ることによって、あるいは觸れることによって、彼等の願望を叶えてやることのできる範囲内で、神聖なる場所を通して、移すことに決めた。移すことを済ませると、彼等は尊敬すべき人の身体をば石の棺に納めて、穴を掘った土の中へと、それを横たえた。そして死者は、病者の寝台が置かれているのと同じようにして、埋葬の静けさを迎え入れた。神の人、ゴドリクスは、主の受肉から数えて1170年目の年、自分の隠修士修道誓願から数えて60年目の年、国王ヘンリー2世の統治が始まってから12年目の年、主のフゴヌスが〔ダーラム〕司教の職に就いてから17年目の年、5月21日、木曜日、主の御昇天の大祝日から8日目の日、に死んだ。この者の行った善き行いが、過ちに対する許しをば私達にもたらさんことを、そして未来にあっては、永遠なる生を許し給う主の御手によりて、もたらさんことを。アーメン。

断想若干

以上が修道士ガルフリドゥス作るところの『聖ゴドリクス伝』の内、その第2節から第9節までと最終節であるところの第74節とについて私が試みた全訳の結果の報告である。

試訳を通読してみて明らかになるのは、商人ゴドリクスについての経済史的研究という私の掲げる目標からするならば、この聖人伝が蔵する独自の史料価値は、その成立事情からして当初より予想されていたように、大きなものでは決してない、ということである。直接に利用することができるのは第2節と第3節、そして第4節だけである。従って、商人ゴドリクスを研究するためには、レギナルドゥス作の『聖ゴドリクス伝』を読み込むならばそれだけで充分なのであって、ガルフリドゥスが作った伝記の価値は補足的なものに過ぎない。ただし、レギナルドゥスの『聖ゴドリクス伝』はあまりにも浩瀚に過ぎるからして、商人ゴドリクスではなくして隠修士ゴドリクスの生活を手っとりばやく知ろうとする者にとっては、ガルフリドゥスの略伝がそれなりに便利なものとして重宝されるであろうことは間違いがない。

ここで、ガルフリドゥス作『聖ゴドリクス伝』の、経済史の史料としての価値に関連して、一筆しておきたいことがある。最近になって私は気づいたのであるが、周知のようにアンリ・ピレンヌは、ヴァルター・フォーゲルの論文に教えられて初めて聖ゴドリクスの経済史的意義を知ったのである。けれども、実は、聖ゴドリクスなる人物の存在だけならば、フォーゲル論文を読む以前から既にピレンヌは知っていたのではないか、と思われる節があるのである。このことは、聖ゴドリクスの存在をばピレンヌに教えたその史料の記述がそれを経済史の史料として利用することができるだけの内容をば充分には備えていなかったことを物語るものである。その史料こそが、ガルフリドゥス作の『聖ゴドリクス伝』なのである。

1895年に発表した論文「中世における都市の統治諸制度の起源」の第二章第二節の記述に関して設けた脚注において、ピレンヌは次のように書いている。「11, 12世紀には都市に、確実に、極めて富裕な商人、本物の資本家、がいる。Flach, op. cit., p.369を見よ。」¹⁴⁾ここでピレンヌが参照を求めているフラックの前掲書というのは、Jacques Flach, *Les origines de l'ancienne France*, t. II, 1893のことであるが、ピレンヌは上に私が引いた記述に続けて、以下のように述べているのである。「フラック氏, 369ページ, 注3は、素晴らしい例を提供している。」ここでピレンヌが言及している素晴らしい例というのは、次のような意味の、ラテン語の記事である。「そのほかに、ヴィゼリアクムには、聖ペトロのフーゴーと呼ばれる人物がいた。新来者で、生れも育ちも不詳、貧しい家に生れたが、道具の扱いに精通した働きによって、裕福になった。」この時にはピレンヌは何故かこの記事の出典を示していない。しかし1914年の論文で再びこの記事を用いた際には出典を詳記している。*Historia Vizeliacensis monasterii*, éd. d'Achery, *Spicil.*, t. II, p. 528, ¹⁵⁾と。しかし、私が注目するのは、実は、この聖ペトロのフーゴーなる人物ではなくして、1895年の論文で聖ペトロのフーゴーに論及したその後で、ピレンヌが、「*Miracula S. Rictrudis AA. SS. Boll.*, mai, III, p. 111を付け加えよ。」と注意を促していることなのである。この史料もまた先のヴィゼリアクム修道院史と同じく、1914年の論文において再度言及されている。そしてその際には以下のように詳説されているのである。「*Acta Sanctorum Boll.*, mai, III, p. 112に収められている*Miracula Sancti Rictrudis*は、商業利潤による富の形成に関してもう一つの意味深い実例をば私達に提供している。〔以下『 』の中は原文ラテン語〕『彼は、ヘントの一人の市民であった。商業に専念して、船でしばしばドウエまで商品を輸送して行き、そして同地から商品を輸送して来る習慣であった。その結果、多種多様

¹⁴⁾ 参照の便宜を考慮に入れて、敢えて原論文ではなくして私の訳書の頁によって問題の個所を示すならば、ピレンヌ『中世都市論集』創文社1988年、131頁注90。

¹⁵⁾ Pirenne, Henri, *Les périodes de l'histoire sociale du capitalisme*, *Bulletin de l'Académie Royale de Belgique, Classe des Lettres*, 1914. 引用はPirenne, *Histoire économique de l'occident médiéval*, Bruxelles et Paris 1951, p. 27, n. 2に拠る。

なる品物を内容とする彼の富は増加して行った。』¹⁶⁾見落してならないことは、ここでピレンヌが、Acta Sanctorum Boll., mai. IIIを引用していることである。つまりピレンヌにとっては既に1895年の時点で、Acta Sanctorum Boll.は馴染みの深い史料だったのである。1847年にイギリスで初めて出版されたレギナルドゥス作の『聖ゴドリクス伝』がピレンヌにとっては1895年には未知の史料であったのに反して、1680年にベルギーで刊行された『教会暦日表順の聖人伝』5月第3巻の方は、熟知の史料だったわけである。そうであってみれば、1685年に公刊されている同叢書の5月第5巻にピレンヌが眼を通していなかったとは、まずは考えることができないであろう。ピレンヌは第5巻をも読んでいたはずなのである。読んでいたはずであるにもかかわらず、そこで寓目したと推定されるガルフリドゥス作の『聖ゴドリクス伝』は、ピレンヌの、然り、中世都市創造の原動力となった社会層の痕跡を史料の中に探し求めていたピレンヌの、強烈なる関心をば惹くことが全くなかったのである。ピレンヌの関心を惹きつけるだけの内容をそれがもっていなかったことを、この事実は物語っていると判断されるのである。

以上相当にくださしく説明して来たように、ガルフリドゥス作の略伝は、商人としてのゴドリクスを研究する上では補助的な役割を果し得るだけのものである。にもかかわらず私が、この研究ノートの稿をわざわざ草したのは、先行諸文献が刊本伝記から引用している断片記事を寄せ集めては苦しまぎれの私抄本を作る作業から始めざるを得なかった私としては、先にも述べておいたことであるが、レギナルドゥス作の伝記の他になお存在すると伝え聞くガルフリドゥス作の伝記をも利用した先行諸文献が存在する以上は、大きな利益がそのことによって得られそうには見えないにせよ、とにかく必要な限りにおいて、ガルフリドゥス本をも自分で読んで見ないことには気持ちが落ち着かないという事情があったのである。

しかし、浅学を露呈しながらの、そしてまた冒頭に述べておいた範囲に対象を限定した上での、試読によってさえもなおいくばくかの功德に与ることができたのは幸いなことであった、と言わなければならない。以下私が与ることのできた若干の功德をば思い浮ぶがままに列記することで、この小論を閉じることにするが、この覚え書の記述が相当に個人的な感慨の吐露に近くなりかねないのは、上記の事情からして避け難いことであつたとしてお許しを頂きたい。

まず第一の恩恵は、ゴドリクス晩年の風貌について世に伝えられている具体的な描写の根拠についての私の考え方を改めるべきではないかと思うようになったきっかけが与えられたことである。私は当初、フォーゲルがその論文末尾に、原文を掲げることも、参照すべきページ数を指示することも、これをしないで、伝記作者は伝えている、と記すだけの伝記作者

¹⁶⁾ Ibid.

とはレギナルドゥスのことであると思い込んでしまっていたのであるが、フォーゲルが私達に伝えているゴドリクスの風貌と、ガルフリドゥス作の伝記に伝えられているそれとがあまりにも酷似しているところからして、フォーゲルはガルフリドゥスの伝えている描写をそのまま踏襲しているのではないかと、という気がしてきたのである。フォーゲルが彼の論文の材料にしたのは、レギナルドゥス本そのものではなくしてスティーヴンソンが校訂した刊本である。その刊本には、校訂者スティーヴンソンがガルフリドゥス作の『聖ゴドリクス伝』の記述の中で「この巻に収録する価値があると思われる唯一の部分はプロローグ」であるとして、そのプロローグをば自分が執筆した序文の付録IIとして収めているのである。¹⁷⁾フォーゲルはレギナルドゥス作の『聖ゴドリクス伝』ではなくして、この刊本伝記に序文の付録IIとして収録されたガルフリドゥスの記述に依拠して、あの論文末尾の風貌描写を行ったのではないであろうか。私が抱くようになったこの疑問は、レギナルドゥス作の『聖ゴドリクス伝』全巻を読み通して、ゴドリクスの風貌描写がそこに存在するか否かを確認して見れば直ちに氷解する性質のものである。けれども、これは、それほどまでに重要な問題ではないし、そもそも私はスティーヴンソン校訂の刊本のコピーを取寄せの際にその当時必要最小限と考えた範囲にコピーの依頼を限定してしまったので、今のところ確認のしようもないのである。ただ、もし私が現在推定しているように、フォーゲルが伝えている聖ゴドリクスの風貌の根拠がスティーヴンソン版刊本に序文の付録IIとして収められているガルフリドゥス作の伝記のプロローグであるとするならば、アラン・デルヴィルが鋭くも見落すことのなかった「軼云々」という個所を、フォーゲルの方は重要視することなくこれを見過してしまったのだ、ということになるであろう。

第二の収穫についても事情は第一の場合とやや類似している。ゴドリクスの没年月日についてフォーゲルは「聖ゴドリクスは1170年5月21日に死んだ。墓誌銘が伝えているように、彼は隠修士としてフィンカレで60年間暮した(伝記331頁)」と明記しているので、この場合には刊本伝記の331頁で確認すればたやすく事は決着するのであるが、あいにくな事に私の手許にあるコピーは331頁までは届いていない。そのため私は、ゴドリクス死去の年月日についてこれまでのところ間違いなく確実なところを納得することができずに、田中正義の提唱する1172年死去説を明確に否定し去ることができずにいた。¹⁸⁾しかしガルフリドゥスの『聖ゴドリクス伝』の第74節を読んだ今では、ゴドリクス死去の事情はこれすべて、全く疑問の余地なく、明らかに知ることができるのである。1170年という年が、ガルフリドゥスの伝えてい

¹⁷⁾ ただし、スティーヴンソンが序文の付録IIに採録したPrologusは何故か3つの節に区分されている。1685年のポランドイスト版のPrologusは2つの節に分けられている。前者の第1節と第2節が後者では第1節にまとめられてい、前者の第3節が後者の第2節に相当している。

¹⁸⁾ 佐々木克巳「サンクトゥス・ゴドリクスのこと」『成蹊大学経済学部論集』第37巻第2号(2007)64頁注3。

るように、「イングランド国王ヘンリー2世の統治12年目の年，ダーラム司教フゴヌスの就任17年目の年」であることは間違いのないところである。そのように正確なガルフリドゥス執筆の記事によって，その年が，ゴドリクスの「隠修士の修道誓願から数えて60年目の年」であったこと，更にはその年の5月21日が木曜日であったことまでが，ようやく私に対して確定されたのであった。

第三の収穫は，先には目次の紹介という形でしか伝えることのできなかった，¹⁹⁾ 商業の世界から信仰の世界へとゴドリクスが移っていく経緯をば，程よい詳しさににおいて，ほぼ正確に，ガルフリドゥスの記述から読み取ることができたことである。

第四は，ガルフリドゥスの『聖ゴドリクス伝』を読むことによって，スティーヴンソン編の現行刊本伝記の記述の順序に不自然さの認められることを改めて認識するきっかけが与えられたことである。ガルフリドゥス作の『聖ゴドリクス伝』の第3節では，例のイルカ捕獲のエピソードが恰もゴドリクスが既に始めていた商人活動の代表的な一例であるかのように扱われているのが読まれる。言うまでもなくこれは，極めて不自然な，間違った順序なのであるが，全く同種の現象が，実はスティーヴンソン編の刊本伝記にも認められるのである。レギナルドゥス作の『聖ゴドリクス伝』には3種の稿本が現存し，刊本伝記はその内の第三稿を底本として採っているのであるが，第一稿，第二稿をも考慮に入れた上で編集されている。とりわけ重要なのは，第二稿と第三稿との関連である。第二稿には，スティーヴンソン刊本で第11節とされている記述が含まれているが，第12節，第13節に相当する記事は存在しないのである。それに反して，第三稿では第二稿にはあった第11節が削除されて存在しない。その代りに第12節と第13節とが加えられ，第14節に第11節の記事の極く一部分が忍び込まされているのである。この4つの節のすべてをスティーヴンソンは自分の編集する伝記の中に採り入れて公刊したのである。编者としては止むを得なかったところであり，妥当な処置であったと言うべきであろう。しかしながら，その刊本伝記を読み，史料としてこれを利用する立場の者が，充分なる注意を上記した編纂の事情に払わないとするならば，誤った判断がそこに生ずる恐れなしとしないのである。²⁰⁾ 刊本伝記を素直に読み下していきさえするならば，記述の順に不自然な点のあることは直ちに気がつくはずである。何故ならば，第11節において既にゴドリクスが村まわりの行商人から出発して，商人の仲間組織に参加した上での城まわり，町まわりの遍歴商業に従った次第が記述されているにもかかわらず，それに続く第12節，そして第13節においては時期的には少年時代に遡って，当時ゴドリクスが移り住んでいた海岸の村で経験した危険なイルカ捕獲のエピソードが語られるという不自然な展開があり，

¹⁹⁾ 佐々木前掲「国訳嘗試」304-307頁。

²⁰⁾ フォーゲルの陥った誤りについては既に指摘しておいた。佐々木前掲稿305頁，佐々木「文献の中の聖ゴドリクス」『成蹊大学経済学部論集』第41巻第1号（2010）32頁。

第14節に至ると第二稿にはあったが第三稿では削られてしまった記述が極めて簡潔な形に姿を変えて忍び込まれているからである。一篇の伝記のストーリー展開としては何とも不自然な構成である。こうした事情については既に指摘しておいたのであるが、²¹⁾ガルフリドゥス作の『聖ゴドリクス伝』を読んで見て、ステイーヴンソン編の刊本伝記を史料として利用する場合に用心すべきことの一つとして、そのことを再認識した次第である。

第五の、そして私にとっては最も大きな、収穫は、ゴドリクスには文字の知識が無かったことを教えられたことである。第8節に次のように明記されているからである。「そして、俗人であったので、文字を知らなかったので、文字で書かれた一切のことは、言うまでもないことであるが、言葉で記憶していたのである。」

この記事は、ゴドリクスにはそこそこの文字の知識があったものと想定していた私に反省を強く迫るものであった。しかし、落ち着いて考えて見ると、この記事については、早呑み込みをする前に、なお考えめぐらしておいた方がよいことがいくつか残されているように思われてきたのである。

まず第一に、上に引用した記事は、隠修士60年に及ぶゴドリクスの信仰生活の中でも初期段階に関するものであるからして、終生同じ状態がそのまま続いたのであったか否かについての判定は、従ってまた、レギナルドゥス作『聖ゴドリクス伝』第三稿が書き上げられてそれを作者から見せられた時にゴドリクスが、手書本を読むことによってそのあらし位は知り得たかどうかについての判定は、伝記の全体が通読されるまでは、これを保留しておいてはいけないであろうか。²²⁾

第二に、観察の範囲をゴドリクスの隠修士生活の初期段階に限定した場合でも、ゴドリクスは、上に引用しておいたガルフリドゥスの記述にもかかわらず、本当に目に一丁字もない文盲の徒であったのだろうか、という疑問が私には残る。何故ならば、ゴドリクスが、そして又その仲間の商人達が、仮令その身に充分なる文字の知識はもたなかったにしても、各地の言語に精通していたことは間違いのないところだからである。異邦に赴いて、まさか身ぶり手ぶりだけでは然るべき数量の商取引ができなかったであろうことは常識の判断に属する。事実、彼等商人が各地の言語に通じていたことは同時代の史料がこれを立証するところであり、その史料をピレンヌが引用しているし、²³⁾プラーニッツも同じ史料をピレンヌに追隨して援用している。²⁴⁾その史料とは、Liber Miraculorum Sancte Fidis, éd. A. Bouillet, Paris 1897なる

²¹⁾ 注) 19を見よ。

²²⁾ 佐々木克巳「文献の中の聖ゴドリクス」59頁の、追記は断定的であり過ぎた。

²³⁾ 参照の便宜を考慮して邦訳書の頁のみを指示しておく。アンリ・ピレンヌ(佐々木克巳訳)『中世都市』創文社1970年215頁注7。

²⁴⁾ 参照の便宜を考慮して邦訳書の頁のみを指示しておく。ハンス・プラーニッツ(鯖田豊之訳)『改訳版中世都市成立論』未来社1995年33頁注11。

奇跡譚集であって、その63頁に次の一節が読まれるのだと言う。>>et sicut negociatori diversas orbis partes discurrenti, erant ei terre maisque nota itinere ac vie publicae diverticula, semite, leges moresque gentium ac lingue<<. これは、ある商人についての記述である。文意は、「そして彼は、世界の種々の部分を往復する商人がそうであるように、陸上および海上の道、公道の枝別れした道、小道、外国の法、風俗、及び言語に通じていた。」というところであろうか。問題は、彼等の言語の知識が、外国人力士の日本語と同じように、文字を介することのない、話し言葉中心のものであったと推定されることである。しかし、言語の知識は、文字の知識に限り無く近かったのではないだろうか。早い話、ゴドリクスは商人時代から自分の名前位は読み書きができたのではないか。

更に、時代も事情も著しく異なっているけれども、かつてピレンヌがその最後の著書の中で鋭くも指摘したことをも -- メーロヴィング時代からカーロリング時代へと社会が転換するのに伴って書体が走り書きの書体からゆっくりと丁寧に書く書体になっていったことからピレンヌが、「走り書きの書体はある意味では商業向きの書体であった。とにかく文字を書くことが日常の必要事であった時代の書体であった。」²⁵⁾と指摘していることをも、併せ考える必要がないであろうか。農民とは違って、商人、それも行商人ならいざ知らずゴドリクスのような航海商人、遠隔地商人、にとっては、最小限度の、限り無く符丁に近い文字の知識は、必要不可欠のものだったのではないだろうかというのが、ガルフリドゥスの明言あるにもかかわらず、なお私に残る疑問なのである。

そして最後に考えておかなければならないことは、そもそもガルフリドゥスが、と言うよりは第8節に種本を提供したゲルマヌスが、ゴドリクスは文字が読めなかったと判定した際のその判定の基準は、聖職者がもっている、あるいはもっているべきである、文字の知識だったのではないだろうか、ということである。判定の基準をゆるめて判定するならば、その結果に色あいの変化が現れるのではないだろうか。「心を入れて、また繰り返して、人の世の行動のための教訓を、徹底して学び知るところを始めた。(中略)より抜け目のない精神の基礎となるものを、自分の血肉と化しつつ、鍛錬するに努めた。」²⁶⁾あるいは「勤勉な商業の合い間には、非常に多くの、世俗の知識の知恵を学んだ。」²⁷⁾そのように伝記が伝えている「抜け目のない精神の基礎となるもの」、「世俗の知識の知恵」の中には、商取引に必要な、最小限度の文字の知識が含まれていたに違いないと推定しては、果していけないのであろうか。

(2011.2.14)

(成蹊大学名誉教授)

²⁵⁾ 参照の便宜を考慮して邦訳書の頁のみを指示しておく。ピレンヌ(中村宏・佐々木克巳訳)『ヨーロッパ世界の誕生』創文社1960年403頁。

²⁶⁾ 佐々木「国訳嘗試」316頁。

²⁷⁾ 同上311頁。

史料

Vita S. Godrici eremite, auctore Galfrido monacho coaevo, in Acta Sanctorum, Mai. V., P. 68-85, Antwerpen 1685.

Libellus de vita et miraculis S. Godrici, Hermitae de Finchale, auctore Reginaldo Monacho Dunelmensi, ed. by Stevenson, Joseph, London and Edinburgh 1847.

邦語文献（邦訳文献を含む）

佐々木克巳（1960）アンリ・ピレンヌ『ヨーロッパ世界の誕生』創文社（中村宏と共訳）

（1970）アンリ・ピレンヌ『中世都市』創文社

（1988）アンリ・ピレンヌ『中世都市論集』創文社

（2007）「サンクトゥス・ゴドリクスのこと」『成蹊大学経済学部論集』第37巻第2号63-87頁

（2008）「『聖ゴドリクス伝』部分国訳嘗試」『成蹊大学経済学部論集』第38巻第2号293-324頁

（2010）「文献の中の聖ゴドリクス」『成蹊大学経済学部論集』第41巻第1号27-61頁

鯖田豊之訳（1995）ハンス・プラーニッツ『改訳版 中世都市成立論』未来社

高山博・池上俊一編（2005年）『西洋中世学入門』東京大学出版会

宮松浩憲（1993）『西欧ブルジュワジーの源流』九州大学出版会

（2004）『金持ちの誕生』刀水書房

外国語文献

Derville, Alain (1992), De Godric de Finchale à Guillaume Cade, dans *Le Marchand au moyen âge*, Paris, P. 35-47.

Flach, Jacques, (1893). *Les origines de l'ancienne France*, Vol. 2, Paris.

Pirenne, Henri (1951), *Histoire économique de l'occident médiéval*, Bruxelles et Paris.